

# マフィアとジェンダー

— パレルモの反マフィア運動の視座から —

高 橋 友 子

## はじめに

2006年4月11日、イタリアの議会（上院と下院）総選挙の結果、ロマーノ・プロディが率いる中道左派連合ウニオーネが、それまで政権の座にあったシルヴィオ・ベルルスコーニの右派連合に悲願の勝利を納め、5年ぶりに左派政権が成立した。

そして、奇しくも同日、43年もの間逃亡中であったマフィアのボス、ベルナルド・ブロヴェンツァーノがシチリア島の州都パレルモの南方にある彼の故郷コルレオーネの田舎家で逮捕された。この男は、1986-87年のいわゆる「マフィア大裁判」（被告456人中、342人が有罪宣告を受けた）の立て役者であったジョヴァンニ・ファルコーネと彼の親友パオロ・ボルセッリーノの両検事を1992年に相次いで爆殺し、翌年1月の「ボスの中のボス」トト・リーナの逮捕後シチリア・マフィアのリーダー格となり、報復行為としてローマ、フィレンツェ、ミラノでの一連の爆破事件を引き起こした主犯であると見なされる人物である<sup>(1)</sup>。

43年もの長い間逃亡生活を送りつつ、マフィアのボスとして組織を指揮することがどうして可能だったのだろうか。

シチリアのマフィアは日本のヤクザと同じような犯罪集団であるが、その実態は、「ゴッドファーザー」などの映画に見られるものとはかなり異なる。マフィアは、イタリアの政界と癒着し、しかもその関係は歴史的に構築されたも



写真1 ファルコーネ検事（パレルモ地方裁判所内で筆者が撮影）

のである。また、近年のシチリアのマフィアは企業化し、とりわけ建築会社や産業廃棄物を扱う企業に姿を変えているので、外からは見えにくくなっている。先述のプロヴェンツァーノがマフィアの「会計士」と呼ばれていたことが、まさにこのことをよく表わしているだろう。

シチリアのマフィアは本来男性だけの集団で、組織の秘密は「沈黙」の掟 *omertà* によって厳格に守られるべきものとされてきた。だが、1980年代以降、転向し司法当局に協力すべく組織の秘密を話す元マフィアの構成員（「改心者」

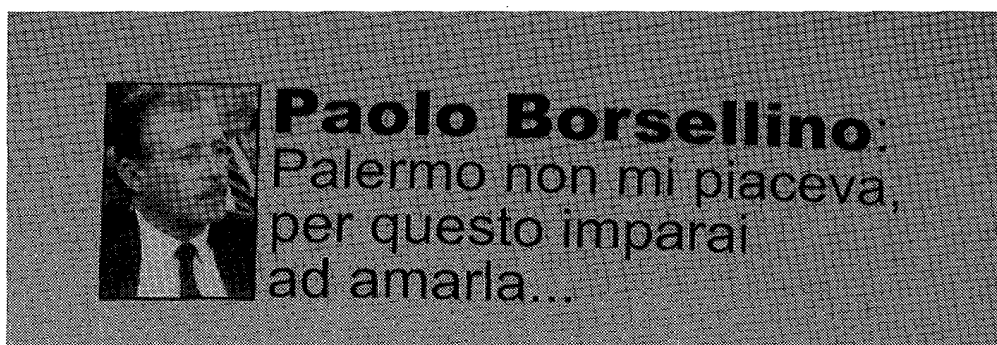


写真2 ボルセッリーノ検事（パレルモ地方裁判所内で筆者が撮影）

pentito と呼ばれている）が次々に現われ<sup>(2)</sup>、マフィアの全貌が明らかになりつつあるとともに、90年代になると「女ボス」も出現し、「マフィアの世界も女性解放か」とイタリアのジャーナリズム界で騒がれた。

しかしながら、その一方で、マフィアについての正しい理解はイタリア本国でも十分に定着しているとは決して言いがたく、マフィアとシチリア人に対する誤解や偏見がはびこっているのが現状である。そこで、本稿では、マフィアにかんするイタリア初の本格的な研究所である「ジュゼッペ・インパスタート」シチリア資料センター Centro siciliano di documentazione “Giuseppe Impastato”（現在はNPO。以下、インパスタート資料センターと記す）<sup>(3)</sup> による研究の成果をもとに、まず、マフィアの過去と現在について考察する。そして、男性のみの集団としてのマフィアをジェンダーの視点から分析するとともに、はたして本当にマフィアの世界に女性が「進出」しているのか、またマフィアの撲滅をめざす市民運動はあるのか、あるとすれば、どのような活動を行っているのか、といった問題を明らかにしたい。

## 1. マフィアとは何か

まずはじめに、今日的なマフィアの定義<sup>(4)</sup>について述べよう。

マフィアとは、同じ象徴、儀礼（入会式）、規範（「沈黙」の掟）といった装置と、ひとつの集団としての利害やアイデンティティとによって団結し、自ら

の共同体の内部で政治的な支配権の行使をめざす組織である。現在では私的な企業の姿を借り、これを経営している。したがって、企業マフィアはきわめて資本主義的であって、決してかつて言われていたような前近代的で封建的な性格の組織ではない。しかし、企業の姿を借りているにもかかわらず、自らが商品やサービスを生み出すことはせず、他の企業や政界などに寄生しつつ自らの利益を享受するのである。そして、家族や雇用、市政などに根ざした保護・被保護の関係の網で、あらゆる社会階層の人びとを取り込む。先述のプロヴェンツァーノが43年間も逃亡生活を続けることができたのは、このような関係の網に守られていたからである。

また、マフィアは暴力集団であると思われがちであるが、マフィアの目的は権力の行使と富の追求である。そして、彼らの武器は脅迫であり、マフィアが暴力に訴えるのは、最終的な手段としてだけなのである。それゆえマフィアは、他の犯罪組織のように国家と敵対するのではなく、既存の政治体制の内に入り込み、国家そのものを占拠することをめざす。このような意味で、マフィアは自立的ではなく、寄生的な性格の持ち主なのだ。「パックス・マフィオーザ」*pax mafiosa* という皮肉めいた言葉があるが、これは、マフィアの支配が堅固で末端の部署にまで行き届いている状態を指し示す表現である。

このように定義するならば、マフィアは他の秘密結社などと共通する要素をもつことになるが、シチリアのマフィアが今日にいたるまでには、歴史的な背景があるので、これを見過ごすわけにはいかない。

マフィアの歴史は4つの時期に区分されうる<sup>(5)</sup>。第一の時期は、16世紀から19世紀初期までで、この時期はマフィアの孵卵期である。第二の時期はイタリアが統一される19世紀後半から1950年代までで、この時期は「農村的」段階として特徴づけられる。一方、第三の時期は1960年代で、この時期は「都市的・企業的」段階と見なされ、第四の時期は1970年代から今日までで、「金融的」段階と特徴づけられている。つまり、マフィアは時代の変化に適応し、各時代の政体に迎合しつつ生き延びてきたのである。それぞれの段階をより詳細に見て

みよう。

周知のように、イタリアは1860年代に統一運動が展開されるまで小国分立の状態にあり、シチリア島は15世紀以来スペインの支配下にあった。イタリア北部では12世紀以降数多くの都市国家が成立し、大きな都市国家が小さな都市国家を併合して領域国家になっていった。一定の自治の伝統があり、商工業が発達していた北部に対して、イタリア南部では、アラブ人、ノルマン人、ドイツ人、フランス人、スペイン人といった異民族の進入と支配が繰り返され、ラティフォンドと呼ばれる、大土地所有制が押し進められるにいたった。「進んだ北部」と「貧しく、遅れた南部」というふたつのイタリアの構図は、このような歴史的背景から生まれたのである。

さて、スペインの支配下にあったシチリア島では、土地は、ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画「山猫」に描かれているようなスペイン系の少数の貴族によって支配され、公的な司法権力がせい弱であったために、私的な暴力が放任されていた。このような無法状態を利用して私的な暴力の担い手となったのが、領主貴族に仕えていたならず者と、異端審問官の手下たちであった。彼らこそが、マフィアの祖先となった者たちである。彼らは、「保護」という名目で農民（小作人）から上納金を取り立てる一方で、貴族からも恐喝行為を行ない、富を蓄積した。彼らはまた、家畜泥棒や誘拐などの犯罪行為に手を染めたが、処罰を受けることはなかった。それどころか、このような行為はしばしば公権力と共謀して行なわれたので、民衆は公権力を信用しなくなっていった。このような現象は、インパスタート資料センター所長のウンベルト・サンティーノによって、「前マフィア的現象」*fenomeni premafiosi* と呼ばれている。すでに1830年代の公文書に、司法の保護を享受するボスの下で犯罪行為を行ない、共同体の支配を行使する組織、すなわちマフィアの原型が存在することが記されている。

マフィアは、第二の段階であるイタリア統一以降になると、工業を中心とする北部と大農場経営の南部という支配ブロックの構成要素となる。マフィアは

スペイン系の貴族に代わって、国家統一後の新たな地方権力と融合し、農民を統制しつつ、地方の共同体と中央政府との仲介者となっていく。マフィアによる政治家のための悪評高い票集めも、このころから行なわれるようになる。そして、ファシズム期の初期にムッソリーニによる中央集権化政策によって一時的に弾圧されるものの、生き延びて第二次世界大戦後のシチリアの地方政治を支配することになる。

第三の段階に相当する1960年代は、シチリア島で都市化が進んだ時期である。都市化に伴い、マフィアは農村から都市へと進出し、政党や政治家との関係を利用しながら企業の仕事に参入する。そして、公共事業の入札を操作したり、食糧市場や水利、地方公共団体にかんする雇用や財政を意のままにするとともに、上納金の取り立て対象を、農民から都市の商工業者に代えていった。この時代は、冷戦構造と反共産主義がマフィアと政党、とりわけキリスト教民主党との一枚岩的な関係を促進した。マフィアの活動の場はもはやシチリア島だけでなく、イタリア国内全体へと広がっていったのである。マフィアはまたこのころから、国際的な煙草の密売や麻薬の取引に着手するようになり、後者は1970年代以降、マフィアにかつてなかったような莫大な富をもたらすことになった。

第四の段階のマフィアは、公金への依存状態から脱却し、麻薬や武器の取引によって得た「汚れた金」を浄化（マネー・ロンダリング）すべく、あるいはこうした収益を合法的な投資に用いるために、国際的な金融機関を利用するようになる。莫大な富を獲得したマフィアは、内部ではヘゲモニーをめぐるファミリー間の激しい抗争を繰り返し、外部に向けてはマフィアを告発しようとする検事や官憲、ジャーナリストなどを容赦なく殺害し続ける。また、マフィアとは何の関係もない市民や子どもまでもが、しばしばマフィアの抗争の犠牲になるという事態が増えている。

ここで、本稿の冒頭で名を挙げたマフィアの「会計士」プロヴェンツァーノが間接的に着手していた事業<sup>(6)</sup>に、今日のマフィアの姿を垣間見てみよう。彼

は1963年5月以降逃亡生活を送っていたにもかかわらず、憲兵隊が1984年に作成した報告書によると、当時、建築会社や病院への物品調達会社、そして廃棄物の処理を請け負う会社など10社ほどの企業に関与していた。「保健と廃棄物は、プロヴェンツァーノが見い出し、開拓した金の卵を産む鶏のようなものだ」と、ウンベルト・サンティーノは述べている<sup>(7)</sup>。「エコマフィア」ecomafiaという表現が近年用いられているが、この種のマフィアは危険な廃棄物の不法な管理や不法建築、考古学的発掘品の不法取引などに従事している。特に土木業と廃棄物の処理に関与しているシチリアのマフィアの組織は25もあると推定され、1996年から1999年までの3年間にカッカモやバゲリーアのようなパレルモの近郊都市を含む7つの自治体の議会が、マフィアとの癒着のために解散するという事態まで起きている。

現在のシチリア島の人口は約508万人で、そのうち約5000人がマフィアの構成員であるが見積もられている。そして、これらの構成員は、彼らと利害関係にあるか彼らを恐れている約100万人の「協力者」の便宜を利用することができると言われてしている<sup>(8)</sup>。このような「協力者」がいるがゆえに、プロヴェンツァーノは43年もの間逃亡生活を送りながら、意のままに組織を動かすことができたのであろう。

また、シチリアの社会と文化に大きな影響を及ぼしてきたカトリック教会とマフィアの関係<sup>(9)</sup>についても、若干触れておかねばならない。教会は長い間マフィアの問題には無関心を装ってきた。さらに、マフィアに反対して犠牲になった聖職者たちがまったくいなかったわけではないが、反共主義などの共通の利害がある場合は、教会とマフィアは共犯関係にもなりえた。マフィアの構成員や政治家との直接的な関係が教会に有利な結果をもたらしうるとき、司教や司祭は彼らに迎合したのである。マフィアの構成員の友人として、彼らに便宜をはかる聖職者も珍しくない。近年になってようやく、このような教会自体のゆがみを反省し、マフィアの撲滅をめざして教会も努力するべきだと主張する聖職者が出現した。このような開明的な聖職者のひとりであるコジモ・スコ

ルダート師は、次のようにいう。

「教会の「内」に対しては、マフィア的なものとして形成されうるあらゆる関係…（中略一筆者）…を克服し、政治権力とのいかなる接触をも断ち、教会の主張より人びとの要求を先行させるような奉仕のスタイルを実現すること。教会の「外」に対しては、勇気をもって、マフィアの構成員に与する人びとを遠ざけ、しかし教区共同体への彼らの復帰を排除することなく、彼らが、深い良心の根底から生まれる真の改心に到達するよう努めるべきである<sup>(10)</sup>」

だが、スコルダート師のような聖職者はまだ少数であり、また彼らの活動は個人的なものであるので、彼らの活動の広がりには限界があるのはやむをえない。現実には、教会全体がマフィアを「罪悪」として規定し、マフィアの撲滅に向けて教会が組織的に動くといった可能性にはまだいたっていないのである。

## 2. マフィアと生きる女たち

先述のように、シチリアのマフィアは男性だけの組織である。したがって、そこには軍隊や、ドイツのナチス、イタリアのファシスト党といった全体主義政党のような男性だけの集団と共通する要素をもっている。たとえば、伝統的家父長制への執着と、ミソジニー（女性嫌悪）、そしてミソジニーと表裏一体をなすホモソーシャルな関係などである。これらの要素のそれぞれについて、ジェンダーの視点から分析してみよう<sup>(11)</sup>。

まず、伝統的家父長制にかんしては、カトリック信仰が地域的な文化の根底となっているシチリア島では、カトリシズムに内在する家父長制がマフィアの構成員の家族のあり方にも色濃く反映している。ここで、マフィアの入会の儀礼について手短かに述べておこう。入会の儀礼はふつう、人気のない場所で、組織（ファミリー）の3人以上の構成員の立ち会いのもとで、次のようにして行なわれる。入会者がカトリックの聖人の画像を手に持ち、指を針で刺し、血を画像に塗りつける。そして、画像に火をつけ、それが燃え尽きるまで手を離さないようにし、その間に「自分が約束をたがえるようなことがあれば、この



画像のように、私の肉も燃えてしまってもかまわない」という誓いの言葉を唱えるのである。この誓いは死にいたるまで有効となる。

入会者はこの入会の儀礼を終えると、自分自身を「名誉ある男」uomo d'onoreとして自認する。そして、自分の家族を管理統制する能力と、自らの権威によって家族や親族を動かす能力は、他の構成員から「名誉ある男」として認められ、評価されるための条件となる。つまり、「名誉ある男」とは、伝統的な家父長としての権威的な力を備えた男でなければならない。したがって、自分だけでなく、自分のきょうだい、あるいは妻や子どもが反抗してマフィアの組織に害をもたらすことになれば、「名誉ある男」としての存在意義を失い、死をもって償わねばならなくなる。「名誉ある男」はまた、伝統的な家父長の顔をもっていなければならないので、愛人を作ったり、娼婦を買ったりすることは許されるが、一度結婚すると離婚は認められない。また、他の構成員の妻や娘に手を出したり、辱めたりしてはならないことになっている。しかし、このような家父長的要素については、あくまでマフィアにとって都合の良い面だけが受容されているのであって、マフィアの構成員にとって最も重要なものは、当然のことながら、家族ではなく組織なのである。

次に、ミソジニーについて述べよう。「名誉ある男」が最も重んじなければならないとされる掟は「沈黙の掟」である。この掟はとりわけ女性を意識して発せられており、たとえ妻や母親であっても、自分自身がマフィアの構成員であることや、組織の秘密を彼女らに話してはならないとされている（実際には、妻や母親の側の暗黙の了解があるのだが）。こうした姿勢は、女性を男性の所有物と見なす男性中心主義的な価値観と同時に、女性への強い不信から生じている。男だけの集団が「男らしさ」を誇示すればするほど、その集団はより強いミソジニーの要素を帯びてくる。「名誉ある男」は、自分の感情をさらけ出してはならない。組織の命令に従って、感情に駆られることなく、機械のように殺人や暴力を遂行する「名誉ある男」の姿には、軍隊やファシストと重なるものがある。

したがって、女を組織から排除する一方で、女に男への服従を要求するのがマフィアであるならば、マフィアの構成員の妻や母親、娘は、必然的にマフィアの共犯者にならざるをえない立場に追いやられる。たとえば、マフィアの構成員が殺されると、その妻が息子たちに父親の意思や報復の義務を刷り込むといったケースが頻繁にある。このようなマフィアの女たちの例をいくつか挙げてみよう。

マフィア構成員の家族にはさまざまな例があるが、リタ・アトリアと彼女の母親の場合ほど母娘が対立し、憎み合い、娘が悲劇的な死にいたった例はほかにない<sup>(12)</sup>。

リタ・アトリアは、1974年、シチリア島西南部にあり人口が約12000人の田舎町パルタンナに、地元のマフィアであるアッカルド・ファミリーの構成員ヴィトー・アトリアとジョヴァンナ・カノーヴァの末娘として生まれた。父親は暴力的な男だったが、リタをかわいがった。一方母親は、頑固で無口で突然怒りをぶつけるタイプで、リタの誕生を望まなかった。リタには、姉のアンナ・マリアと兄のニコラがいた。ニコラは22歳になった1985年に、18歳のピエラ・アイエッコと結婚した。このような社会階層にとって、早婚はめずらしいことではない。

だが、兄の結婚から10日後、父親のヴィトーが利害の不一致からアッカルドに殺され、この家族の運命は急転する。ニコラは父の復讐を誓うが、6年後に、妻であるピエラの面前で殺害されてしまった。ピエラは司法当局に協力する決意を固め、当局の保護下に置かれた。リタはこのとき16歳になっていたが、ピエラとともに地元のマフィアについて証言する決心をし、シヤッカ地方検察庁に出頭した。そして、そこで出会ったのが、1992年7月19日にパレルモでマフィアに爆殺されることになるボルセッリーノ検事だったのである。リタは彼に父親のような愛情を感じ、証言を始めた。そして、彼女はピエラとともに、反マフィア委員会の保護を受けてローマに移り、そこで生活するようになる。

ところが、リタの母親が娘の居場所を追求し、未成年者を誘拐したとしてポルセッリーノ検事を告訴してしまう。リタは断固として母親を嫌い、決して母親に会いたがらなかった。しかし、このような緊迫した状況のなかで、ポルセッリーノ検事が殺害された。リタは父親のように慕っていた検事の死にショックを受けるが、気丈にも、「マフィアと闘う前に、意識の自己検診をしなければならない。自分の心の中のマフィアを打倒して初めて、マフィアと闘うことができる。マフィアは友人たちの中にいる。私たちこそがマフィアだ。私たちの誤った振る舞いがマフィアなのだ」と日記に記し<sup>(13)</sup>、ピエラと別れ、自立した生活を始めるために引っ越した。だが、絶望と孤独に打ち勝てずに、自宅のある建物から飛び降りて自殺した。「母は、いかなる理由があろうとも、私の葬儀に来てはならない。私の死後に私を見てはならない」と書き残して<sup>(14)</sup>。それは、ポルセッリーノ検事の死からたった1週間後の出来事だった。

リタは、彼女の望みどおりに、ピエラの生家の墓の中に設けられた、兄ニコラの墓の隣に葬られた。ところが、同年11月2日（カトリックの暦で死者の日当たる）に、リタの母親が突然リタの墓前に現われ、ハンマーを振り下ろして彼女の墓碑と写真を粉々に砕いた。母親は墳墓冒瀆罪のために起訴され、執行猶予を伴った2ヵ月と20日の懲役刑を宣告された。だが、事件はここで終わらず、彼女は娘の遺体をピエラの家から、マフィアの家系であるアトリア家の墓に移させた。娘の遺志に反して、彼女の遺体をアトリア家の墓に葬ることによって、リタの母親は、家と母から離反し司法当局に駆け込んだ反抗的な娘を、永遠に「沈黙」させようとした。この行為は、苦悩と葛藤に苛まれながらも、勇気ある決断と行動に訴えた17歳の少女リタの生そのものの死を意図したものだ。

リタの母親のように、マフィアの家生まれながらも司法当局に協力を申し出た子どもやきょうだいを頑なに否定しようとする姿勢は、マフィア的環境の中で生きる女性のひとつの典型である。しかし、もっと積極的にマフィアの事業に手を染めていた女性の例もある。25人もの孫がいるアンジェラ・ルッソ

は、「ヘロインおばあさん」と呼ばれ、家族や親族を動かしてパレルモ、プーリャ州、北イタリアに及ぶ広範囲の麻薬取引に関与し、1982年に逮捕された(逮捕時は74歳)<sup>(15)</sup>。このケースでは、アンジェラの息子のサルヴァトーレが司法の協力者になったが、この息子のことを母親は次のように語っている。

「私はあの子を許したが、神様があの子を許すかどうかわからない。1年後に出獄すると言われていたが…(中略一筆者)…出獄したら殺される。連中(マフィア)は容赦しない<sup>(16)</sup>」

1984年に3人の男が相次いで殺害された。そのうちのひとりにはアンジェラが関与した麻薬取引を指揮していた組織について証言した人物で、別のひとりはこの人物の息子、そして最後のひとりには麻薬取引とは何の関わりもないアンジェラの別の息子だった。彼女は言う。

「昔パレルモには掟があった。この掟は罪のない母親の子どもを殺させはしなかった。マフィアは、物事が確かでないかぎり、人を殺しはしなかった。正しい掟はこうあるべきだ。過ちを犯した者は償わねばならない。だが、その前に警告されるのが決まりだった。当時パレルモにはこの掟があり、こうしたマフィアがいた。真の男たちがいた。私の父ドン・ペッピーノは真の男だった。彼の前では、トッレルンガ、ブランカッチオ、バーゲリーア(いずれもパレルモ近郊の地名)までもがすべて畏敬の念から震えあがったものだ<sup>(17)</sup>」

しかしながら、「かつてのマフィアは義侠心をもっていて、むやみやたらに人を殺さなかったが、今のマフィアはそうではない」という見解は、マフィアにかんする神話のひとつにすぎない。

さて、イタリアのジャーナリズムによって「女ボス」と称されたのは、マフィアの家柄に生まれ、「ボスの中のボス」と呼ばれたトト・リーナの妻となったニネッタ・バガレッタである<sup>(18)</sup>。彼女はリーナの逮捕後、彼らの故郷であるコルレオーネに帰り、自分と子どもたちのために「ふつうの生活」がおくれるよう、次のような公開書簡を司法当局に送った。

「(私は) 正当な理にしたがって家族と隣人のために子どもたちを教育し、誠

実で真っ当な社会の礎となるべき法制度を守るよう、子どもたちに教え込みました。すべてを完全に守ることが、リーナ家の家訓です<sup>(19)</sup>」

ニネッタはこのような語調で、犯罪者である夫のことにはまったく触れずに、自分と子どもは何の罪もないのに社会から迫害されていると訴えている。だが、実は彼女の長男はマフィアの構成員として起訴されており、書簡の内容は空虚な美辞麗句にすぎない。またニネッタと同様に、彼女の娘もマス・メディアのインタビューで、父親のことを、善良な人間であるにもかかわらず不当に虐げられていると訴えている<sup>(20)</sup>。そして皮肉にも、リーナ家の男たちは地元の方言しか話せないのに、ニネッタとこの娘は完璧なイタリア語を操ることができるのである。

マフィアの女たちのこのような姿勢が、はたして「マフィアの世界でも女性解放」といえるのだろうか。その答えはまったく逆で、彼女たちは結局はマフィアの虜のままなのだ。

いったんマフィア的な環境の中で育った者がその環境から決別することがいかに困難なことかは、以上の例がよく示しているであろう。確かに、彼らにとってそれは親族との決別につながりうるからである。しかし、こうした環境を打破しなければ、自身は潔白にはなれないし、次世代がマフィアに飲み込まれてしまうことを避けることはできない。そして、シチリアには、この困難な選択をあえて行ない、反マフィア運動に着手した人びとがいる。次節では、このような人びとの例に目を向けてみよう。

### 3. パレルモの反マフィア運動—若者から女性へ、再び若者たちへ

反マフィア運動は、すでに19世紀末に起こったシチリア・ファッシ（農民運動）や戦間期の農民闘争、第二次世界大戦後の農地改革のための闘争などの中で展開されてきたが、体制支持者であった大土地所有者やマフィアを国家が支援していたために、常に敗北の憂き目を被っていた<sup>(21)</sup>。

このような状況を打破し、反マフィア運動に新しい視点と若い息吹きを吹き

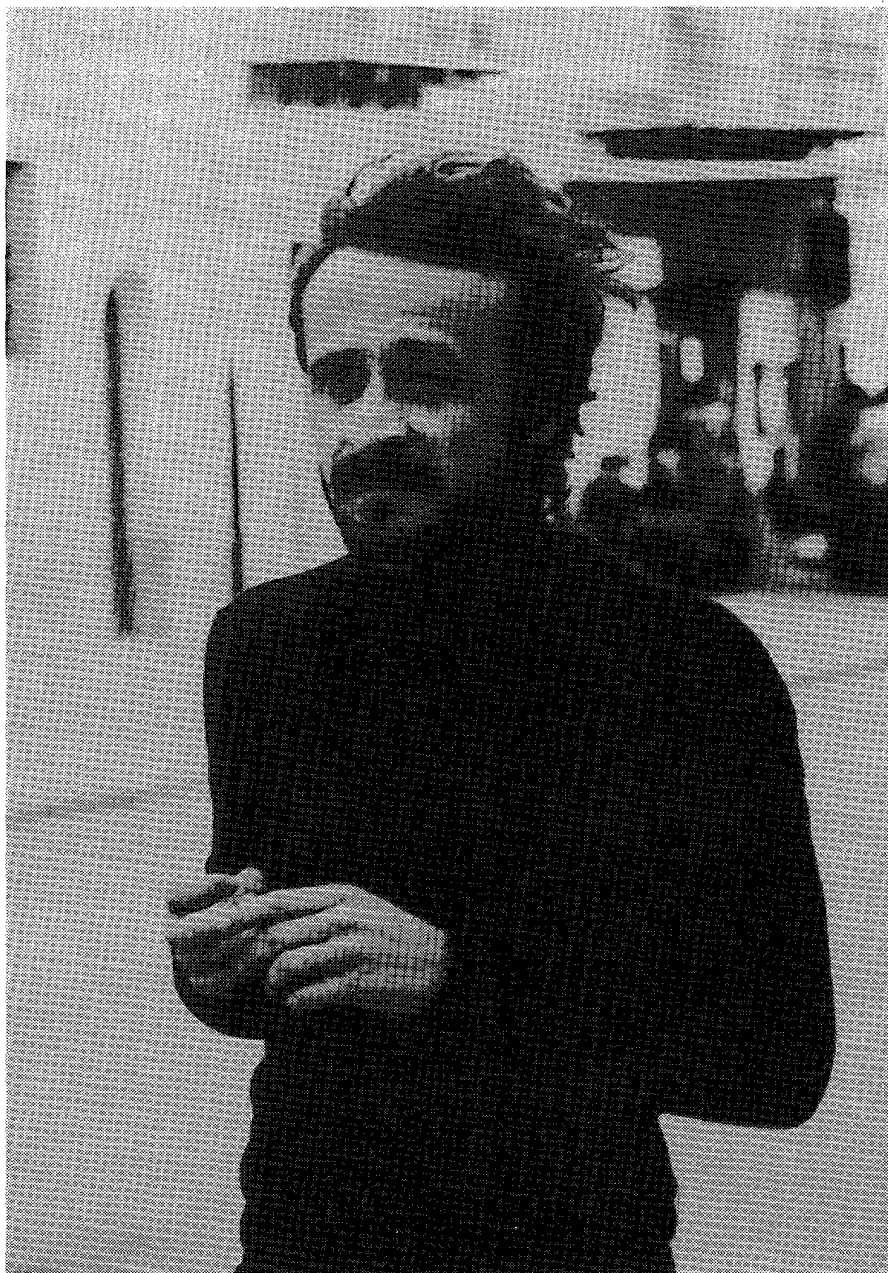


写真3 ペッピーノ・インパスタート

(カタログ “Peppino Impastato. Ricordare per continuare”, Centro Impastato, より)

込んだのは、2000年のヴェネツィア映画祭で脚本賞を受賞した映画「ペッピーノの百歩」(原題は、“I cento passi”)の主人公として描かれたジュセッペ・インパスタート(ペッピーノは彼の愛称)であろう<sup>(22)</sup>。彼は1948年にパレルモ郊外の小都市チニシに生まれた。叔父と一部の親族はマフィアの構成員で、父

の義兄は1963年に車ごと爆殺された地元のマフィアのボスであった。だが、このようなマフィアに囲まれた環境の中で育ったにもかかわらず、ペッピーノは17歳でプロレタリア統一イタリア社会党に入党し、その後新左翼グループのリーダーとなって、パレルモ空港の第3滑走路の建設のために土地を接収された農民と、建設労働者、失業者たちの闘争を指導した。また、マフィアとの関係を保ち続ける父と決別し、1976年に自主管理のラジオ放送「ラディオ・アウト」を創設して、車で市中を巡りながら、空港建設によって国際的な麻薬取引で首位の座を獲得したマフィアのボス、ガエターノ・バダラメンティと地元のマフィアのビジネスと犯罪を告発し続けた。しかし、それから2年後の1978年にマフィアに拉致され殺される。警察と司法当局は彼の死を、行き詰まった新左翼運動家の自殺として処理した。

映画のストーリーはここで終わっているが、実はペッピーノの物語が映画の題材として公に取りあげられるようになるまでには、彼の母フェリーチャと彼の弟夫妻、そして彼らの友人たちがその後20余年にわたって闘い続けた、紆余曲折を経た司法闘争があったのである<sup>(23)</sup>。

インパスタートの名を冠せられるようになったインパスタート資料センターはペッピーノの遺族を支援しつつ、彼の死からちょうど1年目に当たる1979年5月9日に、マフィアに反対するイタリア史上初めての全国的なデモを組織し、約2000人の参加者を得た。そして、1984年によく、パレルモ地方裁判所に史上初めてのマフィア専従班が創設され、ペッピーノの殺害がマフィアによるものであったことが認められた。その3年後に、母フェリーチャは自著『我が家のなかのマフィア』を刊行し<sup>(24)</sup>、バダラメンティを息子の殺害の首謀者として告発する。ペッピーノの事件の起訴はファルコーネとボルセッリーノの両検事が殺された1992年にいったんは断念されるが、その4年後にフェリーチャとペッピーノの弟ジョヴァンニ、そしてインパスタート資料センターの手になる請願書の提出によって捜査が再開され、2000年によくバダラメンティに終身刑が宣告されるにいたった。

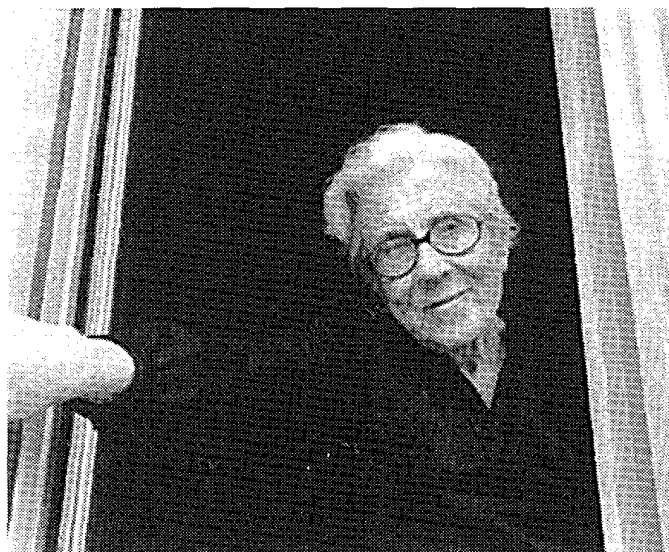


写真4 ペッピーノの母フェリーチャ

(カタログ“Peppino Impastato. Ricordare per continuare”, Centro Impastato, より)

ペッピーノの死後の物語は、遺族と友人、NPOが資料を収集し、署名活動や請願書と記録の提出によって司法当局を動かし、捜査を再開させ、加害者であるマフィアのボスを有罪に導いた比類なきケースである。そしてこの物語の中でとりわけ際立っているのは、ペッピーノの母フェリーチャだ。彼女は、前節で述べたような女たちとは異なって、マフィア的環境を打破し、息子の遺志を継いでこの闘争に心身を捧げた勇気ある女性である。彼女は2004年12月に亡くなったが、彼女の遺志は若い世代に受け継がれている。

女性が大きな役割を担った反マフィア運動のもうひとつの例は、1984年に誕生した「マフィアと闘うシチリアの女たちの会」“Associazione donne siciliane per la lotta contro la mafia”である<sup>(25)</sup>。この会は、反マフィア運動のためにシチリアで初めて女たちが主体的に結成したグループで、会長は、79年にマフィアの銃弾に倒れたチェーザレ・テッラヌオーヴァ検事の妻ジョヴァンナ・テッラヌオーヴァである。この会は最盛期には100名ほどの会員をもっていた。そして、この会は反マフィア運動を「民主主義の墮落、支配と人権侵害の文化に対する闘い」と定義しているが、反マフィア運動における女性の役割を特に重



視し、女性がそのイニシアティブを取るべきだと主張している点がユニークである。会員たちは、マフィアに殺害された検事や警察官の遺族だけでなく、身内をマフィアに殺されてもマフィアに対する恐れと貧しい環境のためにそれまで沈黙していたパレルモの下町の女性たちを支援し、彼女らの話を聞き、身内の死に対して損害賠償請求の起訴を起こせるよう、義援金を募ったり、裁判で証言するこのような女性たちを支援するために、裁判の傍聴に参加したりした。

けれども、この会は残念ながら90年代に入って会員が減り、下町の女性たちの支援を打ち切ってしまった。同じころ、他のさまざまな運動体が相次いで生まれては消えていったことも、会の活力を失わせる要因となったであろう。その後、シチリアの女たちの会は解散してしまった。おそらくは、会としての使命を終え、自然解消したのであろう。一方、現在のパレルモでは、これらに代わる新しいグループが、パソコンやインターネットを自由に操る新たな世代の若者たちによって立ち上げられ、活動している。最後に、最近注目されているグループを紹介してみよう。

2004年6月29日の朝、パレルモの中心街のそこかしこに突如として、「ピッツォ（上納金）を支払う住民はみな、自尊心なき住民である」と書かれたマニフェストが貼られた。だれの仕業かをめぐって、憲兵隊が捜査を始め、パレルモ県知事は公共の秩序と安全のための委員会を県庁に召集した。当初、この事件の仕掛人は、マフィアへの上納金の支払いを断固拒否して、1991年8月にマフィアに殺害されたリーベロ・グラッシのような企業家であろうと推測された。ところが、実は仕掛人は、30歳に満たない7人の若者たちが立ち上げた「アッディオ・ピッツォ」“Addio Pizzo”（「さらば上納金」の意味）というグループだったのである。彼らはマフィアのテリトリー支配を覆すために、一般の消費者としての市民に訴える戦術を考案した。つまり、上納金を支払っている店で日々の買い物や会食をするな、という訴えである。パレルモ検察庁によると、実際のところ、同市の商店主の約80パーセント、シチリア州全体では約

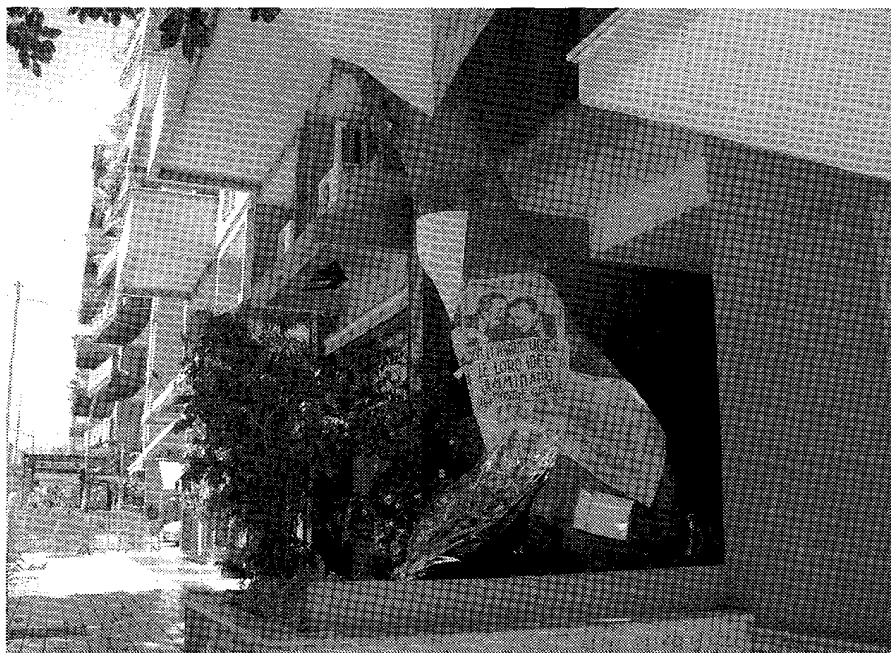


写真5 ファルコーネの木

(かつての彼の家の前の木に、彼の遺志に賛同する人びとが、それぞれの想いを書き留めていく。撮影は筆者)

70パーセントがマフィアに上納金を支払っており、同州において約5万人がマフィアの恐喝の犠牲となっている。そして、上納金から得られるマフィアの収入は、一年に約100億ユーロにのぼるという<sup>(26)</sup>。上納金はマフィアの非合法的な収入のたった16パーセントにしか相当しないが、その災禍はこの数字よりもはるかに大きい。というのは、上納金の支払いは、マフィアのテリトリー支配の基盤であり、それはシチリアの経済的損害となるだけでなく、シチリアの住民の尊厳を否定し、彼らを隷属状態におとしめるシンボルとなっているからである。したがって、上納金を支払わない店のリストを公表し、そこで買い物や会食をするよう、「アッデオ・ピッツォ」の若者たちは市民に呼びかけるのである。このグループが創設された当初7名だったメンバーは、現在30余名に増え、上納金を支払わない店のリストも、徐々にではあるが伸びている。

「アッデオ・ピッツォ」は、規模としてはまだ小さなグループである。だが、反マフィア運動のために個々の市民にできることは何かを考え、そうした

市民のひとりひとりがつながり合って環境を改善していこうという姿勢は、グローバル化が進む今日のような社会にあってはたいへん重要だと思われる。

また、92年にマフィアに爆殺されたボルセッリーノ検事の妹で、政治改革のためにシチリア州議会の議長職をめざすリタ・ボルセッリーノを支援するべく生まれた、シチリア生まれの学生たちの運動体「リタ・エクスプレス」も、今日注目される若者主体のグループである<sup>(27)</sup>。このグループはシチリアだけでなく、イタリア全土に運動の輪を広げようとする一方で、マフィアの町としてのみ知られているコルレオーネで、昨年9月に、この町のイメージを変えるための一連のイベント活動なども展開している。

## むすび

一般に、シチリアのマフィアは「名誉ある男たち」、すなわち男性のみから成る組織であると、長い間言われ信じられてきた。しかしながら、1980年代以降マフィアにかんする神話や言説が次々に覆されていくようになると、今度は「マフィアの世界でも女性解放か」というようなことが、イタリアのジャーナリズム界で取りあげられるようになった。だが、マフィア的な環境に生き、マフィア的な価値観に固執する女たちは、決して解放され自立した女性たちではない。

マフィアの世界を支配している男性中心主義は、かつてのシチリアやイタリアの社会、あるいは前者に大きな影響を与えていたカトリック教会が、そもそも家父長的な男性中心主義を内包していたのであり、それがマフィアの世界にも反映しているにすぎないという見解もある。この見解に従うならば、マフィアの世界で女性の「主体的な行動」が目立つようになるのは、それを取り巻く社会における女性の進出が、前提として存在するからであり、マフィアの世界もまた、社会全体の中で起こっている現象からまったく乖離しているわけではないということになる。

このような論点に立つならば、マフィアと闘うシチリアの女たちの会が、そ

の創設の当初、「女は母であるがゆえに平和主義者である」「マフィアは暴力である。女は暴力に反対する存在だから、マフィアに対する闘いにおいて一定の役割をもたなければならない」<sup>(28)</sup>と主張していたことには限界があることがわかる。「男性は生来暴力的で、女性は産む性であるがゆえに平和を希求する」という主張は、かつてのエコロジカル・フェミニズムの一部のグループの主張と同じもので、今日では、このような男女のジェンダーに基づく二元論には何の科学的論拠もないことが明かとなっている。

マフィアの神話が覆されるのと同じくして、黒い喪服姿の寡婦に象徴されてきたシチリアの女性をめぐる神話も解体された。筆者がマフィアの問題に関心を持ち、初めてパレルモのインパスタート資料センターを訪ねてから、今年でちょうど12年になる。本稿を執筆するにあたって、昨年、一昨年と続けてパレルモを訪問したが、この都市はかつてと比較すると、旧市街の復興や海岸沿いの道路整備といった面で飛躍的に改善され、観光業においても新たな活気が見られる。都市の外観だけでなく、内面もまた、「アッデオ・ピッツォ」のような若い勢力による貢献が実を結び、より良くなるよう期待と支援を送りつつ、本稿を結びたい。

## 注

- (1) プロヴェンツァーノについては、彼の逮捕とほぼ同じ時期に、次のような伝記が刊行されている。Oliva, Ernesto, e Palazzuolo, Salvo, *Bernardo Provenzano. Il ragioniere di Cosa nostra*, Catanzaro: Rubettino, 2006.
- (2) 最初の「改心者」は、ファルコーネ検事に協力し、マフィアについて供述した元マフィアのボス、トンマーソ・ブッシェッタである。彼については、Arlacchi, Pino, *Addio Cosa nostra*, Milano: Rizzoli, 1994 (邦訳：ピーノ・アルラッキ、大辻康子訳、『さらばコーザ・ノストラ——だれも書けなかったマフィアの真実』、学研、1995年)が詳しい。
- (3) シチリア資料センターは、1977年にウンベルト・サンティーノによって創設された自主経営による研究所で、1980年5月に文化協会 *Associazione culturale* として正式に設立し、1978年にマフィアに殺害された新左翼の運動家ジュセッペ・イン

パスタートの名前を冠せられた。そして、1998年以降、同センターは非営利組織(NPO)に変わった。

同センターの目的は、マフィアとそれに類似した現象にかんする知識を、イタリア国内と国外に普及させ、このような現象と闘うための発意を推進し、法にかなった文化と、民主主義の発展とそれへの参加を促し、普及させることである。このような目的のために、同センターは、マフィアと他の組織犯罪にかんする専門的な図書室、定期刊行物の資料室、文書室を有するとともに、政治、経済、歴史、社会学にかんする資料を収集し、研究を進め、文化活動(学会、研究会、討論、展覧会など)を推進し、研究書や一般書、小冊子、さまざまなパンフレットなどを、イタリアと国外で刊行してきた。

同センターはまた、平和運動や、新自由主義に基づくグローバリゼーションに反対し、民主主義への参加と人権尊重を世界に普及するための運動にも従事している。

- (4) 本稿に記したマフィアの定義は、以下の文献に基づく。Cavadi, Augusto, *La mafia spiegata ai turisti*, Trapani: Il pozzo di Giacobbe, 2007 (筆者の邦訳とともに、6か国語で刊行予定)。“Introduzione allo studio del fenomeno mafioso”, in: *A scuola di antimafia*, Cavadi, Augusto (a cura di), Palermo: Centro Impastato, 1994; Falcone, Giovanni, e Padovani, Marcelle, *Cose di Cosa Nostra*, Milano: Rizzoli, 1991; 拙稿、「マフィアを軸にイタリア近現代史を読む」、『イタリア図書』第16号、1995年。
- (5) マフィアの歴史の時代区分は、Santino, Umberto, “Per una storia sociale della mafia”, in : *A scuola di antimafia, op. cit.*, に基づく。マフィアの歴史については、以下の文献がある。Dickie, John, *Cosa Nostra: A history of the Sicilian Mafia*, London: Hodder & Stoughton, 2004; Santino, Umberto, *La cosa e il nome. Materiali per lo studio dei fenomeni premafiosi*, Catanzaro: Rubbettino, 2000; Marino, Giuseppe Carlo, *La storia della mafia*, Roma: Newton Compton, 1999; Crisantino, Amelia, *Capire la mafia*, Palermo: La Luna, 1994; Lupo, Salvatore, *Storia della mafia dalle origini ai nostri giorni*, Roma: Donzelli, 1993 (邦訳:サルヴァトーレ・ルーポ、北村暁夫訳、『マフィアの歴史』、白水社、1997年); 竹山博英、「マフィア型組織犯罪」、馬場康雄・奥島孝泰編、『イタリアの社会——遅れて来た「豊かな社会」の実像』、早稲田大学出版部、1999年、第9章; 同、『マフィア戦争——ナポリ・カラブリア・シチリアをゆく』集英社、1991年; 同、『マフィア——シチリアの名誉ある社会』、朝日選書、1988年; 藤沢房俊、『シチリア・マフィアの世界』、中央公論新社、1988年。

- (6) “Prefazione di Umberto Santino”, Oliva e Palazzuolo, *op. cit.*, pp. XI–XXXI.
- (7) *Ibid.*, p. XVIII.
- (8) Cavadi, *La mafia spiegata ai turisti*, *op. cit.*, p. 13.
- (9) 教会とマフィアの関係については、*Ibid.*, pp. 16–17. Scordato, Cosimo, *Le formiche della storia. Un itinerario collettivo di liberazione all’Albergheria di Palermo*, Assisi: Cittadella, 1994. マフィアの打倒のための地道な活動をしてマフィアに殺されたプリージ司祭については、*Don Pino Puglisi. Prete e martire*, Trapani: Il pozzo di Giacobbe, 1999.
- (10) Scordato, *op. cit.*, p. 247; Cavadi, *op. cit.*, p. 17.
- (11) ジェンダーの視点からマフィアを分析した最初の研究は、Siebert, Renate, *Le donne, La mafia*, Milano: il Saggiatore, 1994. とりわけ、同書の “I Parte La mafia attraverso il prisma di genere”.
- (12) リタ・アトリアについては、Rizza, Sandra, *Una ragazza contro la mafia. Rita Atria, morte per solitudine*, Palermo: La Luna, 1993; Puglisi, Anna, *Donne, mafia e antimafia*, Trapani: Di Girolamo, 2005, pp. 56–58; Madeo, Liliana, *Donne di Mafia*, Milano: Mondadori, 1994 (邦訳：リリアーナ・マデオ、中村浩子訳、『マフィアの女たち』、時事通信社、1996年、pp. 222–254).
- (13) Rizza, *op. cit.*, p. 137.
- (14) *Ibid.*, p. 127; Siebert, *op. cit.*, p. 143.
- (15) アンジェラ・ルッソについては、Siebert, *op. cit.*, pp. 221–227; Pino, Marina, *Le signore della droga*, Palermo: La Luna, 1988, pp. 90–100; Puglisi, *op. cit.*, pp. 51–53, 98.
- (16) Puglisi, *op. cit.*, p. 52.
- (17) *Ibid.*, p. 53
- (18) ニネッタ・バガレッラについては、*Ibid.*, pp. 84–91.
- (19) *Ibid.*, p. 87.
- (20) *Ibid.*, p. 88.
- (21) 反マフィア運動の歴史については、Santino, Umberto, *Storia del movimento antimafia*, Roma: Editori Riuniti, 2000; idem, *Sicilia 102. Caduti nella contro la mafia e per la democrazia dal 1893 al 1994*, Palermo: Centro Impastato, 1995.
- (22) ジュセッペ・インパスタートについては、Impastato, Felicia Bartolotta, *La mafia in casa mia*, Palermo: La Luna, 1987; Vitale, Salvo, *Nel cuore dei coralli. Peppino Impastato, una vita contro la mafia*, Catanzaro: Rubbettino, 1995; Impastato, Giuseppe, (a cura di Umberto Santino), *Lunga è la notte. Poesie, scritti, documenti*,

- Palermo: Centro Impastato, 2002; Associazione culturale “Peppino Impastato”, *Peppino Impastato: da Musica e Cultura alla Manifestazione Nazionale Antimafia*, Cinisi, 2005; Giordana, Marco Tullio, *I cento passi* (日本語タイトル「ペッピーノの百歩」), 2000.
- (23) ペッピーノの死とその後の司法闘争については、Santino, Umberto (a cura di), *L'assassinio e il depistaggio. Atti relativi all'omicidio di Giuseppe Impastato*, Palermo: Centro Impastato, 1998; *Peppino Impastato: anatomia di un depistaggio*, Relazione della Commissione parlamentare antimafia presentata da Giovanni Russo Spina, Roma: Editori Riuniti, 2001; Puglisi, Anna, e Santino, Umberto (a cura di), *Cara Felicia. A Felicia Bartolotta Impastato*, Palermo: Centro Impastato, 2005.
- (24) Impastato, Felicia Bartolotta, *op. cit.*
- (25) 「マフィアと闘うシチリアの女たちの会」については、Puglisi, Anna, *Donne, mafia e antimafia*, *op. cit.*, pp. 143-147; Siebert, *op. cit.*, pp. 432-439; 拙稿「マフィアと闘うシチリアの女たち」、『女性学年報』第16号、1995年。
- (26) “Nascita del movimento”, <http://www.addiopizzo.org/nascita.asp>, pp. 5-6.
- (27) 「リタ・エクスプレス」については、cf. <http://www.ritaexpress.it>
- (28) Siebert, *op. cit.*, p. 432.

## 謝辞

本稿の執筆に当って、ジュセッペ・インパスタート・シチリア資料センターのウンベルト・サンティーノさんとアンナ・プリージさんに心からの感謝を捧げる。

Vorrei ringraziare di cuore prof. Umberto Santino e prof. ssa Anna Puglisi del Centro siciliano di documentazione “Giuseppe Impastato” per la loro affettuosa collaborazione.



写真6 インパスタート資料センターのアンナとウンベルト（撮影は筆者）



Summary

## The Mafia and Gender: The Anti-Mafia Movement of Palermo

TAKAHASHI Tomoko

The Sicilian Mafia, an organized group of criminals like Japanese “Yakuza”, is not fully understood even in its native Italy. Historically, it has developed the cozy relationship with Italian political circles. Recently, it is difficult to observe the activities of the Mafia, because it goes under the disguise of construction companies or industrial waste companies.

The secrets of the Sicilian Mafia, originally a male-only group, have been closely kept. However, after the 1980s, the judicial authority has been making a vigorous investigation of the whole picture of the secretive organization. Also, in the 1990s, articles titled, for example, “Women’s Lib in the Mafia?” were featured in the Italian press.

This paper will be based upon the research done under the Centro siciliano di documentazione “Giuseppe Impastato” which is the first full-fledged reserch center of the Italian Mafia. We would like to review the past and the present of the Mafia, and make a gender-analysis of this male-only organization. Also, this paper will examine the relationship between women and the Mafia, introducing several women who supported the criminal organization or who were to live in a close relationship with the Mafia. Finally, we would like to take a close loot at the activities of Giuseppe Impastato, who were murdered in the late 1970s because of his accusation of the Mafia (featured in an Italian film in 2000). At the same time, the judicial strife for his honour fought by his family and friends over the past 20 years, activities of “The Association of Women

fighting against the Mafia,” recent anti-Mafia activities by the young Palermitans will be reviewed. This paper, we would like to hope, will shed new light on the changing society of Sicily and the relationship between women and the Mafia.